

ものがたり
あかりの物語④

白熱電球 (はくねつでんきゅう)

イギリスのジョセフ・スワンが電球を発明したのは1878年です。エジソンは、その1年後に竹のフィラメントを使って長寿命化に成功しました。この時の竹は日本の京都から調達されたものです。熱を発する物から光が発生していることに気がつき、電気の力で高熱を発生させ光らせたのが電球です。そのため、白熱電球は今のLEDと違い、手で触れないほどの高温になります。

【あかりの豆知識】 頭の上で電球が光る!?

漫画やアニメなどを見ていると、よく「アイデアがひらめいた!」という場面で電球マークがピカッと光る表現がありますよね? 「ひらめく」という言葉は、もともと雷のように「瞬間的にするどく光る」という意味でした。頭の上で電球が光るおなじみの場面は、一瞬でパッと明るくなる電球の光り方に影響を受けたものです。LED照明が広まってきた今でも、ひらめきを表すイメージに電球が使われているのは面白いですね。



白熱電球はフィラメントを「燃やしている」状態なので、ガラス球の中に空気(酸素)が入っているとすぐ切れてしまいます。市販の白熱電球はガス入り電球といって、酸素が入らないようにガスが封入されています。

初期の電球は真空電球といってガラス球製造の際に空気を抜いて作りました。そのためガラス球の先端に空気を抜いた痕が残ります。もし、先端がとがった電球を見つけたら、それは100年以上前の電球です。

